

ISSN 2186 – 3989

テレビ番組における代名詞の使用に関する一考察

轟 里香

A Study of the Use of Pronouns in Japanese TV Programs

Rika Todoroki

北 陸 大 学 紀 要
第52号(2022年3月)抜刷

テレビ番組における代名詞の使用に関する一考察

轟 里香*

A Study of the Use of Pronouns in Japanese TV Programs

Rika Todoroki*

Received December 15, 2021

Accepted February 13, 2022

Abstract

The aim of this article is to consider the use of Japanese personal pronouns in TV programs. Todoroki (1998) shows that there are differences between personal pronouns in Japanese and those in English. According to Todoroki (1998), Japanese personal pronouns are rarely used in TV news programs or newspapers. This is one of the characteristics of Japanese personal pronouns. Including this linguistic phenomenon, Todoroki (1998) compares personal pronouns in Japanese with those in English, which provides an analysis of personal pronouns based on the theory of territory of information developed in Kamio (1990) and proposes a functional constraint on the occurrence of personal pronouns in Japanese.

However, personal pronouns are sometimes used in Japanese news programs as of 2021.

This article considers why there is a change in the use of personal pronouns in Japanese TV news programs and clarifies the reason personal pronouns sometimes appear in TV news programs unlike newspapers, by comparing TV news and entertainment programs. A lot of TV news programs have been changed to be similar to entertainment programs, especially, to TV dramas. The number of personal pronouns used in TV dramas has been increasing in recent years. This affects the language used in news programs and causes personal pronouns in those programs.

1. 導入

本論文は、英語と日本語の人称代名詞の相違と、日本語の人称代名詞のテレビ番組での使用について考察する。

轟 (1998) が指摘するように、従来、日本語のテレビのニュース番組¹において、人称代名詞が使用されることはほとんどなかった。轟 (1998) は、このことを、日本語の人称代名詞に対する機能的制約に基づいて説明した。

一方、日本語のテレビのニュース番組で用いられる言語には、従来見られなかったような現象が見られる。テレビニュースにおけるこのような変化を踏まえ、轟 (2019) は、テレビのニュースでこれまでは見られなかった日本語の人称代名詞の使用に関しても、従来と異なる現象が見

*北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication, Hokuriku University

られるかどうかを考察した。その結果、2019年当時は、テレビニュースにおいて人称代名詞が用いられないという点ではそれ以前とあまり変化がなかった。轟(2019)はテレビニュースにおいて代名詞が用いられないという状況を、ニュースと娯楽番組の関わりという観点から説明した。そして、娯楽番組の影響として、ドキュメンタリーやニュース番組中のレポートにおいては人称代名詞の出現が観察されることを指摘し、このことが通常のニュースにも影響を及ぼしていくかどうか、継続的な観察の必要性を示唆した。

このような人称代名詞の使用の継続的観察および考察が、本論文における議論の中心である。本論文は、人称代名詞に関して、現在のニュースでは使用例が出現するようになってきていることを指摘する。そして、その背景として、ニュース以外の番組での人称代名詞の使用を見ることによって、その要因を考察する。さらに、ニュースでの代名詞の使用は、ドラマ的な手法の一つであることを示す。

本論文で扱うニュースの例は、主にNHKで放送されたものである。一部、民間放送局で放送されたものにも言及する。

本論文の構成は次のようなものである。2節では、日本語のテレビのニュース番組において、従来、人称代名詞が使用されることがほとんどなかったことを指摘する。3節では、轟(1998)の議論を基に、ニュースと人称代名詞の問題を含む日本語の人称代名詞の特性を見る。4節では、近年のテレビニュースにおける言語現象の例として、「要点の省略・後置」を挙げる。5節では、人称代名詞の使用に関し、近年のテレビニュースに変化が見られるかどうかと、その理由を示した轟(2019)の議論を概観する。6節では、2020年代のニュースにおける代名詞の出現の例を考察し、それが、「要点の省略・後置」と同様、ニュース番組の娯楽番組化、特に、ドラマに似た特性を持つようになってきていることによるものであることを示す。7節では、本論文のまとめを行う。

なお、以下では、原則として、人称代名詞を指して「代名詞」と表記することにする。

2. ニュースにおける代名詞

轟(1998)が指摘するように、テレビのニュースにおいては、従来、代名詞が用いられることはほとんどなかった。筆者が調査した2007年までのニュースにおいて²、アナウンサーあるいはキャスターがニュース原稿を読む形式の部分では、代名詞の使用は観察されなかった。

これは、新聞の場合と同じ状況であると言える。(1)は1990年代の新聞記事の例であるが、内容的には(1a)の英文と(1b)の日本語文はほぼ同じである。しかし、(1a)の英文の記事の場合は代名詞が現われるのに対し、(1b)の日本語文の場合は代名詞が現われない。日本語の記事の方はこの記事全体を見ても代名詞は一度も使われていない。

- (1) a. Hashimoto is apologizing in hopes of containing the political damage caused by Sato's appointment. Faced with a growing national backlash, Hashimoto was forced to let him go and publicly admit his misjudgment.

(Asahi Evening News, September 22, 1997, 轟 1998: 80)

- b. 橋本龍太郎首相は22日、首相官邸で佐藤孝行総務庁長官から辞表を受け取り、辞任を了承した。首相は・・・世論の厳しい批判を受けて、佐藤氏に「自発的な辞任」を要請。佐藤氏も「これ以上国政を混乱させるのは忍び難い」として受け入れた。

(『朝日新聞』1997年9月23日、ibid., 80)

これらの例が示すように、従来、日本語のニュース報道においては、新聞記事・テレビニュースとも代名詞が使用されることはほとんどなかった。

3. 日本語と英語の代名詞の相違

前節では、轟（1998）が指摘するように、日本語のテレビのニュース報道においては、従来は新聞と同様、代名詞がほとんど用いられなかったことを見た。以下では、この理由を機能的観点から説明する轟（1998）の議論を概観する。

3.1 日本語の代名詞の特徴

日本語の代名詞（「彼」「彼女」等）を英語の代名詞（“he”, “she” 等）と比較すると、かなり異なった点が見られる。

英語の代名詞 “he” は、次の例のように照応的に用いられる。

(2) If John_i is around, he_i will do it. (Kuno 1987: 31)

(2) では英語の代名詞 “he” が前出の名詞句 “John” を指して使われている。このような使われ方は、日本語でも見られることがある。

(3) トーマス・クーンもまた、「科学革命」や「パラダイム」という概念によって、知の非連続的な歴史観を唱えた人物として知られています。彼もまた、従来の科学史に異論をとえ、それが一方では科学的法則や理論の発見の羅列に、他方では発見の障害となった迷信や俗信の告発に終わっていると批判しています。

(増田 1995: 233-234、下線は筆者)

上の例では、日本語の代名詞が、照応的に使われており、英語の代名詞と類似しているように見える。

日本語と英語の三人称代名詞について、『日本国語大辞典』は次のように述べている。

(4) a. 「彼」：男性をさす。「彼女」とともに、西欧語の三人称男性代名詞の訳語として一般化したもの。

b. 「彼女」：幕末から明治初期にかけて、西欧語の三人称女性代名詞の訳語として男性をいう「彼」に対して「彼女」の表記が現われる・・・。

(『日本国語大辞典』「彼」「彼女」の項)

この記述によれば、日本語の「彼」「彼女」は英語の “he”, “she” の訳語として当てられたものである³。したがって、英語の代名詞と一見類似した照応的用法を持つことは当然のことと言える。

しかし、日本語の代名詞が英語の代名詞の訳語であったにもかかわらず、様々な現象を見ると、日本語の代名詞は単なる照応的表現ではないことが分かる。中村（1989）によれば、英語の代名詞 “he” は、male human being であればどんなものでも指示物となり得る。英語の代名詞に対する制約としては、統語的制約があるのみである⁴。これに対し、日本語の代名詞「彼」は male

human being であれば何でも指示物になれるというわけではない。

轟 (1998) は日本語の代名詞と英語の代名詞を比較し、その相違に関し三点を指摘している。その一つが本論文の議論に関係しているので、以下で見てみよう。日本語の代名詞には、英語とは異なり、その指示物と話し手との個人的関係 (多くの場合親しい関係) が前提されることが多い。話し手と指示物との間に個人的関係がないことが明らかな場合、代名詞はほとんど用いられない。轟 (1998) はそのことを示すものとして、新聞やテレビのニュースにおいて代名詞がほとんど用いられないことを挙げている。前節で述べたように、英文の記事の場合は照応的表現として代名詞が現われるが、日本語の記事の場合は代名詞が現われない。((1a,b)) このような、新聞記事における英語と日本語の違いを、轟 (1998) は、日本語において話し手あるいは書き手と指示物との個人的関係がないことが明らかな場合代名詞が使われない現象だとしている⁵。

以上のようなことから、日本語の代名詞は英語の代名詞とは異なり、単にその文脈において前出のものを指す照応的表現ではないことが分かる⁶。そのことを示す現象の中に、轟 (1998) が指摘するように、新聞やテレビのニュース番組のようなニュース報道において代名詞が使用されない、ということが含まれている。

3.2 「情報のなわ張り」による説明

前節で指摘した日本語の代名詞に関わる現象について、以下では、神尾 (1990) の「話し手の情報のなわ張り」という概念を用いた説明を見てみよう。(轟 (1998) の議論による。)

まず、神尾 (1990) は、言語表現が表わす情報がだれに関わりをもつものか、あるいはだれに属するものかという点から言語表現が表わす情報を分析した。神尾によれば、(5a) のような文はだれでも用いられるわけではなく、用いることのできる話し手に制限がある。それ以外の人は、同じ情報を表わすのに (5b) のような表現を使わなければならない。これは、これらの文が表す情報が話し手に属するものかどうか言語表現の違いによって表されるためである。

(5) a. 太郎は病気だ。

b. 太郎は病気がしい。

(神尾 1990: 5,6)

(5a) のような文を用いられるのは、太郎の近親者や太郎の病気について医者から詳しく聞いた人など、この文が表す情報が属している話し手に限られる。それ以外の人は同じ情報を表わすのに (5b) のような表現を使わなければならない。

神尾は話し手または聞き手と言語表現が表わす情報との間の関係に、次のように「近」と「遠」という概念を導入した。

(6) 話し手または聞き手と文の表わす情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は<近>および<遠>の2つの目盛りにより測定される。

(ibid., 21, 下線は筆者⁷)

(5a) の表現を使うとき太郎が病気だという情報は話し手に「近」であるのに対し、(5b) の表現を使うときこの情報は話し手に「遠」であることになる。このような情報の「遠」「近」という概念を用いることにより、「情報のなわ張り」は次のように定義される。

(7) <Xの情報のなわ張り>とは、(6) により X に<近>とされる情報の集合である。ここで、X は話し手または聞き手とする。(ibid., 21)

(5a) では太郎の病気という情報は話し手の情報のなわ張りに属し、(5b) では話し手の情報のなわ張りに属していないことになる。

神尾 (1990) は (5) の場合のように、ある文の表わす情報とその文の全体的文形との間の関係を論じている。すなわち、文形の中には、直接形のようにその情報がだれに「近」であるのか示す文形がある。一方、文の一部を成す単語や句にもそれ自身のなわ張り関係を表現するものがある。そのような語句に関し、次のような仮定が行われている。

(8) 話し手 (および稀には聞き手) と文の一部を成す語句の表わす情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は原則として「近」および「遠」の2つの目盛りにより測定される。

(9) <Xの情報のなわ張り>とは、(8)によりXに<近>とされる情報の集合である。ここで、Xは話し手または聞き手とする。

語句の場合、(8)の仮定に基づいて(9)の「情報のなわ張り」の定義が適用されることになる⁸⁾。

神尾は「話し手の情報のなわ張り」を示す語句を幾つか挙げているが、人称代名詞については述べていない。轟 (1998) は、日本語の代名詞を、「情報のなわ張り」を示す語句に属するものとし、日本語の人称代名詞の機能的特性として(10)を提案している。

(10) 日本語の人称代名詞は、その指示物に関する情報が「話し手の情報のなわ張り」に属することを標示する。

(轟 1998: 83)

(10)により、前節で指摘した、代名詞に関わる現象を説明することができる。以下では、ニュース報道において代名詞が現れない理由を、(10)により説明する。

ニュース報道では、話し手または書き手 (ニュースキャスターやアナウンサー、新聞記事の著者など) と指示物との個人的関係はない。仮に、話し手と指示物との個人的関係があったとしても、そのことを示すことは通常行われまいであろう。これは、日本語の代名詞の使用においては、話し手と代名詞の指示物との個人的関係が前提されることが多いという点と関わっている。(10)の制約により、日本語の人称代名詞は、その指示物に関する情報が「話し手の情報のなわ張り」に属することを標示する。よって、話し手と代名詞の指示物との個人的関係が前提されることになる。話し手と代名詞の指示物との個人的関係が前提されない場合は、代名詞を使うと不自然になる。したがって、日本語の代名詞は、新聞記事などニュース報道では使用されないことになる。新聞記事において代名詞を使うと、次の例が示すように、不自然となる。

(11) 橋本龍太郎首相は22日、首相官邸で佐藤孝行総務庁長官から辞表を受け取り、辞任を了承した。首相は……世論の厳しい批判を受けて、佐藤氏に「自発的な辞任」を要請。佐藤氏 (??彼) も「これ以上国政を混乱させるのは忍び難い」として受け入れた。

(ibid., 83)

新聞記事と同様に、テレビニュースにおいても、これまで、代名詞の使用はほとんど見られなかった。これに対し、以下のような文脈において、ニュース番組中での代名詞の出現が見られる場合があった。

(12) 三宅 (キャスター) : そのキリエンコというのはどういう人物なんですか?

上田 (解説委員) : 彼がこれまで話したことからある程度予想はつきます。

(「おはよう日本」、NHK、1998年4月8日放送、ibid., 86)

(12) のような例において代名詞が出現することも、(10) の制約を使って説明できる。(12) は、ニュース番組の中で解説委員とアナウンサーが会話形式のニュース解説を行っていた際のやり取りである。ここで、解説のテーマとなっている人物を指して、解説委員のみが「彼」を使っている。この場合、解説委員は話題となっている人物に関する情報を自分の専門的知識としてアナウンサーおよび間接的に視聴者に提示していると考えられる。したがって、話題になっている人物は解説委員の情報のなわばりに属していると考えられる。このように考えれば、この場合もやはり (10) に基づいて代名詞「彼」が使用されていると言える。

4. 近年のテレビニュースにおける言語の変化

ここまでで指摘したように、従来、日本語のテレビのニュース報道においては、代名詞の使用はほとんど見られなかった。この点ではテレビのニュース報道は新聞記事と同じであった。

一方、代名詞に関わる現象以外の言語現象を見ると、近年のテレビニュースにおいて、新聞記事とは異なる様々な言語現象が見られる。この点を示すために、この節では、そのような様々な言語現象の中から、「要点の省略と後置」を取り上げ、テレビニュースが新聞記事とは異なる特徴を示していることを見る¹⁰。「要点の省略と後置」とは、本論文では、文あるいは談話の重要な要素が省略され後ろに動かされることと定義する。

まず、談話における要点の省略と後置の例を見てみよう。轟 (2013, 2015) が指摘するように、近年のテレビニュースにおいては、しばしば、あるニュース項目の中で最も重要な情報を表す文が、第二文以降に置かれる。

(13) では、次です。巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。こちら、きのう宮城県沖で発見されたマグロ漁船の船首部分です。船長は今も行方不明のままです。当時現場海域を外国船籍の自動車運搬船が航行していたことが分かり、海上保安本部が詳しい状況を調べています。宮城県金華山の沖合 300 キロ。浮かんでいるのは、2 つに割れた漁船。その船首部分です。さらに、離れたところには、沈没しかかった船尾部分。高知県須崎市のまぐろはえ縄漁船、第七勇仁丸が 2 つに割れていました。きのう午前 10 時過ぎ、遭難信号を発信。船長の義澤宏志さんが行方不明となっています。海上保安本部によりますと、救助された乗組員は、自分たちの漁船に大きな船が衝突してきたと話しているということです。

(「ニュースウォッチ 9」NHK、2013 年 6 月 24 日放送、轟 2013: 171)

このニュース項目の冒頭分「巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。」は、ニュースにおける要点であるいわゆる 5W1H に属する情報が欠けている。このニュースは、これが放送された前日に起こった事件に関連したものであるが、その事件を報道した新聞記事は次のようなものである。

(14) 23 日午後 1 時ごろ、宮城県金華山の南東約 300 ㌔の沖合で、海上保安庁の航空機が、船体が 2 つに割れて転覆している高知県須崎市のマグロはえ縄漁船、第 7 勇仁丸 (19 トン、乗組員 9 人) を発見した。第 2 管区海上保安本部 (宮城県塩釜市) によると、船長の義澤宏志さん (52) が行方不明になっている。大型船と衝突したとの証言があり、船の行方を調べている。

(「漁船転覆、船長が不明」『朝日新聞』(東京) 2013 年 6 月 24 日夕刊 15 面)

(14) の第一文はいわゆる 5W1H に属する情報を含んでいる。(13) で (14) の第一文にあるのと同じ情報が現れている部分に下線を引くと、以下のようになる。

(15) では、次です。巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。こちら、きのう宮城県沖で発見されたマグロ漁船の船首部分です。船長は今も行方不明のままです。当時現場海域を外国船籍の自動車運搬船が航行していたことが分かり、海上保安本部が詳しい状況を調べています。宮城県金華山の沖合 300 キロ。浮かんでいるのは、2 つに割れた漁船。その船首部分です。さらに、離れたところには、沈没しかかった船尾部分。高知県須崎市のまぐろはえ縄漁船、第七勇仁丸が 2 つに割れていました。きのう午前 10 時過ぎ、遭難信号を発信。船長の義澤宏志さんが行方不明となっています。海上保安本部によりますと、救助された乗組員は、自分たちの漁船に大きな船が衝突してきたと話しているということです。

(轟 2013: 178)

(15) を見ると、音声言語であるテレビニュースの第一文で省略された情報が、第二文以降で述べられているが、まとまった文の形で述べられるのではなく、断片的な形で少しずつ述べられていることが分かる。

(16) は、同じ話題について報じた同じ日の別々のニュース番組からの例である。

(16) a. 今年二度目です。北朝鮮から弾道ミサイルの可能性のあるものが発射されました。国連の安全保障理事会が今月 5 日の発射を受けて開いた緊急会合が終わったおよそ 1 時間半後のことでした。

(「ニュース 7」NHK、2022 年 1 月 11 日放送)

b. 一週間もたたないうちに二度目の発射です。今朝、北朝鮮から、弾道ミサイルと推定される飛翔体が発射されました。通常の軌道であれば、日本の EEZ、排他的経済水域の外側に落下したと推定されます。

(「ニュースウォッチ 9」NHK、2022 年 1 月 11 日放送)

両方の番組とも、同じような要点の後置をしているのが興味深い。

上に述べたのは、談話の構造として、要点が省略されるというものである。これに対し、長い修飾語句を伴った名詞句の形で要点の省略が行われる場合もある。

(17) まずは先ほど入ってきたうれしいニュースからお伝えます。今年のノーベル物理学賞の受賞者に、大気と海洋を結合した物質の循環モデルを提唱し、二酸化炭素濃度の上昇が地球温暖化に影響するという予測モデルを世界に先駆けて発表したプリンストン大学の上級研究員でアメリカ国籍を取得している真鍋淑郎さん 90 歳が選ばれました。

(「ニュース 7」、NHK、2021 年 10 月 5 日放送、下線は筆者)

(17) の例においては、ノーベル物理学賞の受賞者がだれなのか、という重要な情報(下線の部分)が、文の最後になるまで出てこない。これは、修飾語句を伴った名詞句を用いているためである。日本語は、英語と異なり主要部末端言語であるため、名詞句を用いると、主要部の名詞は末端に来ることになる。修飾語や修飾節が長くなるほど、主要部の名詞は後に回されることになる。これを避ける方法には、修飾語や修飾節を独立した文にして後に回し、下線部を先に述べるのが考えられる。しかし、(17) においては、あえて修飾語句を伴った名詞句を用い、結果として、要点が後に回されることになっている。これは、近年ニュースで見られる、要点を冒頭で

省略する方法の一つとみることができる。

このニュースは音声多重放送であるので、主音声の日本語と副音声の英語とを比較することができる。(17)に対応する副音声の英語音声では、日本語における修飾語句にあたる部分は主要部の名詞についていない。修飾語句にあたる部分は、独立した文として後ろに回っており、結果として、主要部の名詞が先に現れ、誰が受賞者かという重要な情報が、日本語の場合より早い段階で述べられるようになっている。英語は主要部先端言語であるので、修飾語句を伴った名詞句を使ったとしても主要部の名詞句は先頭に来ることになるが、(17)に対応する副音声の英語音声では、上に述べたような方法で、意識的に重要な情報が早く述べられるようにしているとと思われる。

このように、近年のテレビニュースにおいては、「要点の省略と後置」という、従来見られなかったような現象がみられる。この点で、テレビニュースは新聞記事とは異なっている。この「要点の省略と後置」は、テレビニュースにおいてみられる言語現象の一例であり、その他にも多くの現象がみられる。このような状況にあつては、従来見られなかった代名詞の出現に関しても、テレビニュースにおいて新聞記事とは異なる変化が見られる可能性がある。そこで、轟(2019)は、代名詞の出現に関してテレビニュースに変化が見られるかどうかを考察している。次節ではその轟(2019)の議論について述べる。

5. 轟(2019)における代名詞の出現に関する議論

5.1 新聞とテレビの比較

2節および3節で述べたように、従来新聞やテレビのニュース報道などの場合代名詞はほとんど用いられなかった。轟(2019)は、代名詞の出現に関してテレビニュースに変化が見られるかどうかを見るに際し、まず、新聞記事に代名詞の出現があるかどうかを見ている。

(18) Mr. Abe announced this month that he would visit Pearl Harbor. Japan's Foreign Ministry, in news briefings, indicated at the time that he would be the first sitting Japanese prime minister to visit Pearl Harbor, the site of the surprise attack on a United States naval base 75 years ago. It turns out, though, that he might not be the first, or even the second. It now appears that he is the fourth.

(*The New York Times*, December 27, 2016, LexisNexis Academic, 轟 2019: 85)

(19) 米ハワイを訪問中の安倍晋三首相は 27 日午前 (日本時間 28 日早朝)、太平洋戦争の戦端が開かれた真珠湾で慰霊に臨む。日本の歴代首相はこれまでも、戦地などで「慰霊」や「和解」を試みてきたが、計画通り運ばなかったことも多い。安倍首相が真珠湾訪問に踏み切れたのは、右派勢力の支持も得る政権基盤や安定した日米関係が影響しているようだ。

(『朝日新聞』(東京) 2016 年 12 月 28 日 3 面)

ほぼ同じ内容の(18)の英文と(19)の日本語文のニュース記事を比較すると、(18)の英文の記事の場合は代名詞が現われるが、(19)の日本語文の場合は代名詞が現われない。日本語の記事の方はこの記事全体を見ても代名詞は一度も使われていなかった。このように、日本語では英語と違い話し手あるいは書き手と指示物との個人的関係がないことが明らかな場合は代名詞が使われない。これは、1997年に出現した(1a, b)と同じである。このように、この点は、新聞記事においては、2010年代においても同じ状況であったことがわかる。

一方テレビニュースにおいても、2019年ごろは、代名詞に関しては、目立った変化は見られなかった。すなわち、代名詞の出現はほとんど見られない状況であった。すなわち、代名詞の使用に関してはテレビニュースは新聞記事と同じ状況であったということになる。その他の点で、テレビニュースにおける言語が新聞記事と大きく異なる変化を示していることを踏まえ、轟(2019)は、代名詞の使用に関してはなぜ新聞記事と同じ状況なのかという点を、次の節で示すように論じている。

5.2 テレビニュースにおける言語変化の要因

まず、テレビニュースにおいて新聞と異なる言語現象が生じているのはなぜなのか、考えてみよう。

轟(2014)によれば、テレビニュースにおける言語変化の要因は次のようなものである。

4節で述べたように、近年のテレビニュースにおいては、しばしば重要な情報が、通常生じるところで省かれ、後に置かれる。轟(2013)は、このようなニュースの構造と、文学作品でしばしばとられる手法との類似性を指摘している。小説などでは、重要な情報を省く、あるいは隠して、後のほうに回すということがしばしば行われる。典型的なものは、推理小説であろう。類似した構成をとる作品として2013年の芥川賞を受賞した小説『爪と目』がある。この小説に関して、次のように述べられている。

受賞作「爪と目」は、妻を亡くした男性と同居を始めた愛人と、亡くなった妻の幼い娘との間に漂う、不穏な緊張感を描いた物語。受賞時、書き出しの一文が話題をさらった。「はじめてあなたと関係を持った日、帰り際になって父は『君とは結婚できない』と言った」。思わず読み直してしまうような違和感は、「わたしは三歳の女の子だった」という説明で「娘が語り手なのか」と解消されるけれど、怖いのはそこから。幼い「わたし」が年上の「あなた」の行動を淡々とつづる文章は、愛人が常に娘から監視されているような不気味な錯覚を生み、その先に壮絶なラストシーンが待ち受ける。

(「どう書くか 沈黙の1年」『朝日新聞』2013年11月30日、轟 2013: 172)

ここで、この小説の要点後置の構造が示されている。すなわち、この小説の第一文は、必須要素の省略を含んでおり、「思わず読み直してしまうような違和感」を生んでいる。それが、その後の説明で「解消される」という構造になっている。

この小説の構造と(20)のニュースの例を比較してみよう。

(20) (= (15)) では、次です。巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。こちら、きのう宮城県沖で発見されたマグロ漁船の船首部分です。船長は今も行方不明のままです。当時現場海域を外国船籍の自動車運搬船が航行していたことが分かり、海上保安本部が詳しい状況を調べています。宮城県金華山の沖合 300 キロ。浮かんでいるのは、2つに割れた漁船。その船首部分です。さらに、離れたところには、沈没しかかった船尾部分。高知県須崎市のまぐろはえ縄漁船、第七勇仁丸が2つに割れていました。きのう午前10時過ぎ、遭難信号を発信。船長の義澤宏志さんが行方不明となっています。海上保安本部によりますと、救助された乗組員は、自分たちの漁船に大きな船が衝突してきたと話しているということです。

小説と同様、(20)においては、要点が冒頭部分で欠けており、省略された情報が、第二文以降で断片的な形で少しずつ述べられている。これは、上に述べた小説で取られている構造と非常に類似していると言える。

このような要点の後置を、轟(2014)はニュース番組の娯楽化と関連付けている。近年、テレビのニュースは、娯楽的な要素が強くなっている。このことは、様々な言語現象として現れている。その一つとして、要点の省略・後置がある。要点の省略・後置は、小説のように構造的に要点を省略して後で述べることとして現れる。それだけではなく、4節で述べたように、(17)のように長い修飾語句を伴った名詞句の形で要点の省略・後置が行われる場合もある。要点の後置には、上に上げたような談話の構造的なもののみならず、様々な言語現象が含まれるのである。テレビのニュースにおいて娯楽的な要素が強くなるとともに、従来は見られなかった様々な言語現象が見られるようになってきている¹⁾。

小説においては、明確な目的があって要点の省略が行われる。その目的は、次の文章に示されている。

藤沢周平の小説は、最初の一文を読むと、次を読まずにいられない。(中略)「誰かに見られている、と思った」と始まる「おつぎ」のように、そう認識する主体を出さない入り方も読者を引き込む。「とっさに背を向けたが間にあわなかった」という「晩夏の光」の冒頭文はさらに極端で、情報の空白を追って読者は身を乗り出す。

(中村(2014)、轟 2014: 38)

ここで述べられている「情報の空白」は本稿で議論している要点の省略に対応するものとみなすことができる。「情報の空白」をつくることはすなわち要点を省略することである。これを冒頭で行い、その要点を後で示すという形で要点の移動を行うことになる。小説の場合、冒頭で「情報の空白」をつくることによって、読者を引き込むことを意図している。このように、読者の心に働きかけることが小説の構造の目的である。ニュースにおいて冒頭文で要点の省略が行われるということは、すなわち、小説に似た構造をニュースでとるということである。

このような要点の省略の構造をとるテレビ番組として、ドラマが挙げられる。ドラマもしばしば、早い段階では重要な情報を明らかにしない。典型的には、推理ドラマがそうであるが、それ以外のジャンルのドラマでも、早い段階では重要な情報を「謎」として省略、または隠し、物語が展開するに従いその「謎」が徐々に明らかになる、という構造をとる。

つまり、小説に似た構造をニュースでとるということは、テレビ番組としてはドラマに似た構造をとるということになる。ドラマは娯楽的な番組と言えるので、ニュースにおいて要点の省略が行われるということは、ニュースの娯楽化を示すものと言える。娯楽番組においては、要点の省略と後置が生じており、これがニュースにも広まっているのである。

5.3 2010年代の代名詞の使用状況

4節で述べたように、テレビニュースにおいて言語的な変化が生じていることに伴い、従来は用いられなかった代名詞も、用いられるようになる可能性が考えられる。しかし、5.1節で述べたように、2019年ごろにおいては、代名詞の使用に関しては、テレビニュースに目立った変化は見られなかった。轟(2019)はこの理由を次のように説明している。

5.2節で述べたように、新聞とは異なるテレビニュースの言語変化は、ニュースの娯楽化によって生じている。これを踏まえ、まず、娯楽番組における代名詞の使用を見ると、娯楽番組においても代名詞は従来あまり用いられていなかった。代名詞の使用が娯楽番組において稀である

時期には、ニュースにおいても稀であるという状況になっていた。このことから、ニュースの娯楽化によって代名詞が増えることは生じていなかったのだと言える。言い換えれば、代名詞の使用がニュースにおいて依然として見られなかったことは、ニュースにおける言語変化がニュースの娯楽化によって生じていることを示している。代名詞の使用は、娯楽番組において稀であれば、ニュースにおいても稀であるということになる。

轟 (2019) は、ニュースにおける代名詞の使用の兆しとして、ニュース番組中でもレポートの中で代名詞の使用例が見られることがある点を、次のように指摘している。国際的な事象に関するレポートの中で、代名詞の使用が観察された。一例として、伝統芸能に携わる韓国の 82 歳の女性に関するレポートの中で、この女性を指して「彼女」の使用が見られた。(「キャッチ！世界のトップニュース」NHKBS1、2017 年 11 月 16 日放送)

轟 (2019) が扱ったデータでは、このような代名詞の用法は、ニュース番組においてはレポートに主に見られた。轟 (2019) は、通常のニュースにもこの用法が広がるかどうか継続的な観察の必要性を指摘している。

6. 2020 年代の代名詞の使用状況

6.1 2020 年代のニュースにおける代名詞の出現

2010 年代からそれほど時間が経過していないにもかかわらず、2021 年現在においては、以下のように、国際的な出来事や話題ではない部分で、代名詞の使用例が出現している。

- (21) 一人一人と寄り添っていらっしやいましたけれども、今も苦しみ、孤立する女性たちはいます。女性だけではありません。そうした人たちの存在に気付いてあげて、彼女たち、彼らが助けを求めやすい、人、それから場所をどうやって増やしていくのか、大きな課題です。

(“生きづらさ”女性を支援「おはよう日本」、NHK、2021 年 9 月 30 日放送)

これは、日本国内での経済的に困窮した女性に関するニュースの中で、アナウンサーによる代名詞の使用が見られた例である。おそらく原稿がある部分である。

その他、民間放送局で放送されたニュースにおける代名詞の使用として、以下のような例があった¹²。

- ・殺人事件の被害者を指して「彼女」を使用する。
(「スーパーJチャンネル」テレビ朝日、2020 年 11 月 11 日放送)
- ・コメンテーターが都知事を指して、「彼女」を使う。
(「報道 1930」BS-TBS、2021 年 10 月 4 日放送)
- ・亡くなった沖縄の語り部を指して「彼女」を使う。
(「every」日本テレビ、2021 年 11 月 13 日放送)
- ・中国の行方不明のテニス選手を指して「彼女」を使う。
(「スーパーJチャンネル」、テレビ朝日、2021 年 11 月 23 日放送)

このように、ニュースにおいて代名詞の使用例が見られるようになっている。それらは、(おそらく) 原稿のあるものと自由な発話の両方が含まれている。上の例では、2 番目の例を除き、

おそらく原稿のあるものと思われる例である。

ニュースにおけるこれまでの言語変化が、娯楽番組の影響を受けているものと考えられるため、娯楽番組における代名詞の使用を見てみると、娯楽番組においてもそのような使用例がかなり目立つようになっている¹³。娯楽番組での代名詞の増加に対応するように、ニュースにおける代名詞の使用も目立つようになっている。上で、民間放送局の放送例を挙げたが、民放においては、早い時期から、「ニュース」といわゆる「ワイドショー」の境界があいまいになるという傾向が指摘されていた。(加来 (2007)) そのような民間放送局のニュースのみならず、NHKにおいても、(21) のような例が見られるようになっているのである。

次節では、娯楽番組における代名詞の使用例を取り上げ、その目的を考察する。また、娯楽番組とニュースにおける代名詞の使用例の比較を行う。

6.2 2020年代の娯楽番組における代名詞の出現

轟 (2019) が示すように、2010年代にはテレビ番組における代名詞の使用は、娯楽番組においてもあまり見られないものであった。しかし、それほど時間がたっていないにもかかわらず、最近テレビ番組で代名詞の使用が比較的目立つようになってきている。

娯楽番組の発話には、前もって決められているものと、自由に発話されていると推測されるものがある。前者として、典型的には台本のあるドラマ、後者としては、バラエティー番組におけるインタビューや会話などが挙げられる。この節では、それぞれにおける代名詞の使用の例とその要因を考えてみよう。

6.2.1 テレビドラマにおける代名詞の出現例

以下は、NHKのテレビドラマ「エール」における例である。このドラマは、音楽家を目指す主人公「裕一」と歌手を目指す女性「音(おと)」を中心とした物語である。以下にとりあげる場面では、裕一が音の実家に結婚申し込みに訪れる。(22)は、その際の、音の母と音の会話である。

(22) 音の母「裕一さんはあなたのことが好き。」

音「えへ。」

音の母「えへ、じゃない。いい、おんなじくらい、いや、それ以上、音楽が好き。どちらか選ぶしかない今、彼にとって一番いい道は何？」

(「エール」22話、NHK、2020年放送)

ここでは、裕一を指して代名詞「彼」が用いられている。

(23)は、同じく「エール」の別の場面での裕一の発話である。演奏会本番で、うまく歌えなくなってしまった音を励ました後、聴衆に向かって話しかける場面である。

(23) 裕一「彼女は昨日ちょっと練習しすぎまして。」

(「エール」25話、NHK、2020年放送)

ここでは、音を指して「彼女」が用いられている。

以下は、やはりNHKのドラマ「おかえりモネ」からの例である。このドラマは、東日本大震

災の被災者である女性「百音」の成長を描いた物語である。その中で、百音と親しくなる医師「菅波」という人物が登場する。(24)は、菅波が、以前担当した患者について百音に話した際の発話である。

(24) 彼はホルンの演奏家で、有名な楽団の団員でした。

(「おかえりモネ」65話、NHK、2021年放送)

ここでは、菅波が過去に担当した患者を指して、代名詞「彼」を用いている。

(25) も同じ「おかえりモネ」の中の発話であるが、特に興味深い例である。この場面では、住み慣れた場所の気候が激変したために居住環境として適さなくなった場合どうすべきか、について、百音と菅波が話す。故郷を離れることに抵抗のある百音に対して、菅波は例えを使って話をする。

(25) 菅波「さんまの漁獲高が減っているでしょう。」

百音「はい。」

菅波「彼らは冷たい水が好きなんです。だからわざわざ我慢して生ぬるい水の海域にはとどまらない。自分たちが快適に生きられるように、何も考えずに移動する。それが生物のたくましさだし、そのことに何か後ろめたさを感じる必要はないと思いますよ。」

(「おかえりモネ」67話、NHK、2021年放送)

ここで、代名詞「彼ら」の指示物は、人間ではない。英語の“they”は人間にも人間でないものにも使えるが、それに似た照応的な用法に見える。

しかし、ドラマで代名詞の使用が見られるとしても、これは英語のように単なる照応的用法として用いられているわけではない。前述のように、英語の場合は、**male human being**であれば、どんな指示物にも使え、また、誰もが代名詞を使用する。これに対し、日本語の代名詞に関しては、ドラマにおいても、誰でもが代名詞を使用するわけではなく、あらゆる **male human being** を指示物として用いているわけでもない。そこで、以下では、代名詞を使用している話者とその指示物を見ることによって、代名詞の使用の目的が何なのかを見てみたいと思う。

6.2.2 ドラマにおける代名詞の使用の目的

ドラマなどにおける発話は、日常会話の発話にそのまま従っているわけではない。ドラマにおいては、様々な効果を意図して、使う言葉を選んでいると考えられる。5.3節で述べたように、2010年代の娯楽番組において代名詞の使用は稀であったが、轟(2019)が指摘するように、2017年に放送されたあるドラマにおいて、代名詞が頻出する現象が見られた。このドラマと、2020年代のドラマを比較してみよう。これにより、ドラマで代名詞が使用されるのは、どのような要因によるものかを知ることができる。

代名詞が頻出する現象が見られた2017年のドラマは、「フランケンシュタイン」を題材としたものである¹⁴。このドラマの設定では、一度死んだ若者が、科学者である父親の手で蘇らされ、120歳まで孤独に生きた後、現代の社会で、津軽継実という女子大生と出会う。継実は、菌の研究をしている鶴丸教授のもとで学んでいる。継実と出会った120歳の男性は、「深志研」という名前をもらい、人間社会で生活するようになる。

このドラマにおいては、代名詞の「彼」のみが頻出しており、その指示物は、常に「深志研」

である。(26) は、そのような「彼」の使用が見られた場面の一つである。

(26) 継実：どうして先生、分かったんですか？なぜ原因は彼にあると思ったんですか？深志研さんに。

鶴丸教授：状況から考えてもその可能性は高いと思った。

聖哉（継実の先輩）：これが、彼が寝ていた布団からはえてきたものだ。彼がしめじを食べたから、このような菌が生まれてきたと思うんです。

（「フランケンシュタインの恋」第2回、2017年4月30日放送、轟 2019:87）

この例における「彼」の指示物である深志研は、次のような特徴を持つ登場人物である。

- ・一度死んで生き返った
- ・年齢は 120 歳
- ・社会との関わりをずっと絶ってきた

この人物を指して「彼」がしばしば使われているということは、日本語の代名詞の用法の一つを示しているものと思われる。この指示物は、ファンタジーの世界における特殊な登場人物であり、話者（大学生の継実や聖哉）の属している社会に属する人物とは異なっている。この場合、代名詞「彼」の使用は、その指示物（深志研）が話者の属している社会の外に在ることを示すものだと考えられる。これは、本論文の 3.2 節（10）で指摘した代名詞の用法（情報の縄張りを示す用法）とは一見矛盾する。したがって、このドラマに見られる代名詞の用法は、情報の縄張りに関する代名詞の用法とは別の用法と考えたほうがよいように思われる。

3 節で指摘したように、日本語における代名詞「彼」「彼女」は、幕末から明治期に西欧語の三人称代名詞の訳語として当てられたものである。西欧語の三人称代名詞は、名詞代用表現として用いられる。一方、註 6 で述べたように、Noguchi (1997) は、日本語の代名詞は英語とは解釈が異なり、単なる束縛変項としては解釈されないとしている。そうであるとすれば、日本語において代名詞「彼」「彼女」によって指示物を指すという行為自体がもともと日本語におけるものではなく、英語から来たものであることになる。よって、これを行うことは、異国的な雰囲気につながる可能性がある。言い換えると、名詞代用表現として「彼」「彼女」を用いることが、本来の日本語の用法ではないため、翻訳的な言い回しを用いているという効果を生み、異国的な雰囲気につながるのではないかと考えられる。このような雰囲気を生み出すため、ドラマ「フランケンシュタインの恋」では、話者とは違う世界に属する指示物に対し代名詞「彼」を用いている、とすることができる。これは、代名詞「彼」「彼女」による指示が、元来日本語におけるものではないことが意識されている用法であると言える¹⁵。代名詞が日本語において有標の表現となっていることを利用した用法である¹⁶。

では、2020 年代に入ってからからのドラマの例を考えてみよう。(24) (25) では、代名詞を用いている話者は同じ登場人物で、職業は医師である。(24) は過去の患者について述べており、話し手の情報の縄なりに属している。さらに、この場合の特別な要因として、医者が患者のことについて話すということから、指示物を匿名にする必要があると考えられる。匿名の人物に言及するには、代名詞は便利な表現ではある。代名詞を使わないとすれば、「その人」などの表現を使う必要が出てくるが、「その人」は「彼」に比べて表現が長いため、込み入った長い話で繰り返して使用するにはあまり適さない。

(25) は興味深い例である。ここで、代名詞「彼ら」の指示物は、人間ではない。英語の “they” は人間にも人間でないものにも使えるが、それに似た照応的な用法に見える。すなわち、英語に非常に似た形で代名詞を使用していることになる。そのことの効果として、ここでの代名詞の使

用は、話者が専門職（医師）であることを強調する働きをしている。あえて英語のように照応的に代名詞を用いることにより、登場人物が専門職であることを強調している。つまり、これは、代名詞による指示が、元来日本語におけるものではないことが意識されている用法であるということになる。この点では、2017年放送の(26)と類似した用法だと言える。2017年放送の(26)では、代名詞による指示が元来日本語におけるものではないことによる異国的雰囲気を利用して、指示物が別世界の存在であることを強調している。一方、2021年放送の(24)(25)では、あえて英語のように照応的に代名詞を用いることにより、登場人物が専門職であることを強調している。

これに対し、2020年代に入ってから他のドラマの例には、この用法とは異なっているように見えるものもある。(22)や(23)に関しては、代名詞は登場人物の恋人や妻を指しており、照応的な表現というよりも、名詞的に用いられている可能性もある¹⁷。すなわち、「太郎の彼女」「花子の彼(氏)」という表現における用法に近い用法である。

このように、ドラマにおける代名詞の使用は、様々な効果を目的としたものである。(10)の機能的制約に基づいた、情報の縄張りを示す用法、代名詞による指示が元来日本語におけるものではないことを利用して登場人物の特徴を強調する用法、名詞的な用法、などである。場合によっては、それらが複数組み合わせられたものである可能性もある。

6.2.3 バラエティー番組における代名詞の出現

ここでは、いわゆるバラエティー番組における代名詞の使用例についてみてみよう。

バラエティー番組においては、発話があらかじめ定められているかどうかは、番組や、その部分によって異なると考えられる。厳密には、詳細な調査が必要であるが、以下では、おそらく自由な発話であると思われるものについて考えてみよう。

これは、バラエティー番組における、インタビューでの例である。「あさイチ」NHK、2021年9月24日放送)この番組では、インタビューを受けた俳優が、ドラマ中の自分の役である人物に対して「彼」、相手役の役及び演じる俳優¹⁸を指して「彼女」を用いているのが観察された。

先に述べたように、バラエティー番組には原稿がなく自由に発話されていると推測される部分が多くあり、インタビューの答えや会話などは、おそらくそのような部分にあたるだろう。したがって、その話し手の言葉遣いの習慣などにより影響を受けていると考えられる。それで、上の例でも、代名詞を使う習慣を話し手の俳優が持っているのであろう。しかしながら、この話し手も、すべての指示物に関して代名詞を用いていたわけではなく、特定の指示物に対して用いているのが観察された。つまり、英語のように単なる照応的表現として代名詞を用いていたわけではないと言える。

この例の代名詞の指示物を見てみると、話し手自身が演じている役の人物である。したがって、この指示物は話し手の情報の縄張りに属していることになる。

台本のあるドラマに対し、上の例のような、あらかじめ定められているわけではない(と推測される)バラエティー番組での発話は、日常会話での発話の延長線上にある。出演者のほとんどが、芸能に携わるような職業の人々なので、一般の発話とは異なる特徴を持つ可能性が高いが、そこでの代名詞の使用は、様々な点で注目すべき現象である。

6.3 ニュースにおける代名詞の出現の要因

先に述べたように、テレビ番組の発話には、前もって決められているものと、自由に、あるいは

はある程度自由に発話されていると推測されるものがある。ニュースにおいては、後者と思われるものもないわけではない。(12)の例はそのようなものであろう。このような例では、話し手の言葉遣いの習慣などにより言語表現の使用が影響を受けていると考えられる。

しかし、ニュースにおける発話は、大部分が原稿があるものと考えられる。すなわち、あらかじめ定められている発話と考えられ、この点では、台本のあるドラマと類似していると言える。ドラマにおいて、様々な効果を狙って代名詞が用いられているように、ニュースにおいても、代名詞が用いられていると考えられる。

轟(2019)が指摘するように、2010年代においては、ニュース番組中でのレポートの中での代名詞使用が見られた。先に述べたように国際的な事象に関するレポートの中で、代名詞の使用が観察された。国際的な出来事や問題などを扱ったものの中で、そこに登場する人物を指して代名詞を用いることは、前節で述べた、代名詞の使用の要因と一致する。すなわち、3節で指摘したように、「彼」「彼女」によって指示物を指すという行為自体がもともと日本語におけるものではなく、英語から来たものである。よって、これを行うことが、異国的な雰囲気につながる。言い換えると、名詞代用表現として「彼」「彼女」を用いることが、翻訳語を用いているという効果を生み、異国的な雰囲気につながる。「彼」「彼女」による指示が、元来日本語におけるものではないことが意識されている用法であると言える。これは、(25)のようなドラマの例の場合と同じである。

これに対し、2020年代に入った現在、ニュースにおける代名詞の使用は、国際的な事象に関するレポート以外にも広がっている。

(27) (= (21)) 一人一人と寄り添っていらっしゃいましたけれども、今も苦しみ、孤立する女性たちはいます。女性だけではありません。そうした人たちの存在に気付いてあげて、彼女たち、彼らが助けを求めやすい、人、それから場所をどうやって増やしていくのか、大きな課題です。

このように代名詞を用いるテレビ局側の明確な目的は推測するしかないが、効果としては、明らかに、これまでニュースで用いられた言語とは異なるものとなっている。すなわち、ドラマにおける代名詞の使用と同じ効果を生んでいる。ドラマにおいて、様々な効果を狙って代名詞が用いられているように、ニュースにおいても、代名詞が用いられていると考えられる。ニュースが娯楽番組の影響を受けていることを示している一例と言える。

ニュースにおける代名詞の使用は、ニュースがドラマと似た手法をとるようになってきていることを示している一例である。ニュースがドラマと似た手法をとるようになってきていることを、本論文では、「ニュースのドラマ化」と呼ぶことにする。

「ニュースのドラマ化」は、言語現象以外に、音楽の使用という形でも現れている。小泉(1998)は、「(世界各地のニュースと比べると)日本のニュースは音楽や音楽効果の使用頻度が飛び抜けて高いように思える」と述べている。小泉が指摘するように、日本のニュースでは、かなり早い段階から音楽の使用が見られた。音楽の使用は、ドラマにおいて重要な手法の一つであることは言うまでもない。

また、先に述べたように、近年のニュースは、要点を省略し後置するという、小説に似た構造をとっている。この点も、ドラマと類似している。小説と同様、ドラマもしばしば、重要な情報を「謎」として省略、または隠し、物語が展開するに従いその「謎」が徐々に明らかになる、という構造をとる。この点でも近年のニュースはドラマと類似しているということになる。

ニュースにおける代名詞の使用が「ニュースのドラマ化」によって引き起こされたという本論文の主張は、ニュース番組の中で、どの部分に代名詞が先に現れるようになったかという点からも裏付けられる。ニュースの中で、比較的早い段階から代名詞の使用が見られたのは、轟(2019)

が示すように、ニュース番組のレポートの部分であった。このような部分からドラマ化が始まり、現在はレポート以外の部分にもドラマ化が広がりつつあると考えられる。

「ニュースのドラマ化」により代名詞の出現が引き起こされるということは、新聞の例からも分かる。先に述べたように、新聞では原則として報道の部分においては代名詞は使われていないが、轟（2019）が指摘するように新聞紙面でも代名詞が出現している部分がある。

- (28) 日本語が得意な中国人女優、李香蘭——。戦前・戦中の大陸で日中友好をうたう国策映画などに出て大人気を博した彼女は、日本人だった。
（「紙切れ1枚 運命分けた『2人のヨシコ』」
『朝日新聞』2019年7月28日1面、轟2019:88）

この記事、及び同紙の30面に掲載された関連記事においては、代名詞「彼女」が多く使われている。その指示物は、「李香蘭」（山口淑子氏）、及び「川島芳子」である。戦前から戦後にかけて、日中の複雑な関係を背景に生きた二人の女性に関する記事である。

この記事は、「プレミアムA」と名づけられた新企画の記事として掲載されたものである。この企画について次のように紹介されている。

歴史も国境も越え、あらゆる分野に深く切り込みます。よりすぐりのニュースや物語、ルポルタージュを、紙面とデジタルで伝える新企画「プレミアムA」。
（朝日新聞2019年7月28日30面、下線は筆者）

この企画の記事「紙切れ1枚 運命分けた『2人のヨシコ』」において、代名詞「彼女」が多く使用されていた。

この記事において代名詞が出現している理由として、轟（2019）は次のように議論している。この記事の内容は、新聞発刊時に近い日時に起きたことの報道ではなく、歴史的な出来事を解説するものである。したがって、「物語」に近いものであると見ることができる。物語において代名詞が使われることがあると同様に、この記事においても代名詞が用いられている。

書き言葉における物語は、テレビにおけるドラマに対応するものと考えられる。新聞においても、(28)のように物語的な内容においては代名詞が使用されることがある。テレビニュースの中では、レポートが物語的な内容と見ることができる。これにより、レポートの部分でまず代名詞が出現するようになったと考えられる。これがレポート以外のニュースの部分に広がるということは、ニュース全体が物語的になる、すなわちドラマ化していくということになる。この傾向が今後も続いていくのかどうか、引き続き注視する必要がある。

7. 結論

本論文では、日本語のテレビ番組で用いられる言語変化の一環として、代名詞の使用について考察した。

日本語のテレビのニュース番組で用いられる言語には、従来見られなかったような現象が見られる。このため、テレビニュースで用いられる言語は、新聞で用いられる言語とは異なる特徴を持つようになっている。日本語のテレビニュースにおけるこのような近年の言語変化を踏まえ、轟（2019）は、日本語の代名詞の使用に関してテレビニュースにおいて新聞記事と異なる現象が見られるかどうかを考察した。その結果、その当時は、テレビニュースにおいても、新聞記事と同様、代名詞が使用されることはほとんどなかった。

しかし、ニュースにおいて用いられる言語が急速に変化していることを鑑みれば、継続的な観察が必要であると言える。本論文では、代名詞の使用に関して、そのような変化が見られることを示し、その要因を指摘した。

従来、日本語の新聞やテレビのニュース番組において、代名詞が使用されることはほとんどなかったが、近年、テレビのニュース番組においては代名詞の使用が見られるようになってきている。本論文では、この点を、他の言語現象と同様、ニュース番組の娯楽化によって引き起こされていると言えることを、娯楽番組での代名詞使用例と比較することによって示した。特に、代名詞の使用は「ニュースのドラマ化」によって引き起こされていると主張した。

今後は、ニュース番組での代名詞使用がさらに広がっていくかどうかの観察、また、増加傾向にあることを示すための数量的な検証が必要となる。このような点に関しては、別稿にて論じる予定である。

註

1 本論文中のテレビ番組の例のうち、NHK で放送されたものについて注記する。NHK の分類では、放送するプログラム全体を、「ニュース」とそれ以外のプログラムに二分し、「ニュース」以外のプログラムを「番組」としている。本論文では、「番組」という語を「テレビで放送されるプログラム」という一般的な意味で用いる。したがって、NHK で放送されたものに関しても、ニュースを扱っているプログラムを「ニュース番組」と呼ぶことにする。

2 調査の基となったデータの詳細に関しては、轟 (2014) を参照。

3 「彼」のほうは、表現自体は、人やものを指す表現として古くから存在していたが、これを西欧語の三人称男性代名詞の訳語として当てたものである。

4 統語的制約の例として、Chomsky (1986) の束縛原理がある。

5 英語の代名詞と比較した日本語の代名詞のその他の違い二点は、「対象の identity を尋ねる疑問文には使いにくい」「地位のより高い指示物には用いられない」というものである。轟 (1998) を参照されたい。

6 Noguchi (1997) は、日本語の代名詞は名詞であって束縛変項とは解釈されないとしている。

7 記号<>は原文のままである。

8 神尾によれば、語句の表わす情報の遠近は (5) のような文全体の表わす情報の遠近とは全く独立のものである。

9 日本語の代名詞に関わるその他の現象も、轟 (1998) は (10) により説明している。次の例が示すように、日本語の代名詞は、対象の identity を尋ねる疑問文には使いにくい。

i. a. ?*彼はだれですか?

b. ?*彼らはだれですか?

だれかわからない人が話し手の情報のなわ張りに属することはない。(10) により日本語の人称代名詞は、その指示物に関する情報が「話し手の情報のなわ張り」に属することを標示するので、代名詞を使ってある人物を指しながらその人物が誰かと尋ねると矛盾が生じることになる。なぜなら、話し手の「情報のなわ張り」に属している人物について話し手はそれが誰か当然知っているはずだからである。よって、日本語の代名詞は対象の identity を尋ねる疑問文には使いにくいことが説明され得る。

また、日本語の代名詞は地位のより高い指示物には用いられないが、この現象も (10) により説明できる。親しい友人とは違い、地位のより高い人の場合は、たとえ知っている人であってもあまり親しげに接すると非礼になるので、話し手はその人が自分の情報のなわ張り外にあるように接する必要があると考えられる。地位のより高い対象に代名詞を用いるとその人物が話し手の情報のなわ張りに属すかのように述べることになり、非礼になると考えられる。そこで代名詞の使用は避けられ、代わりに「先生」「課長」のような普通名詞によって指示されると説明できる。いいかえれば、指示物から距離を置くことによって、話者は丁寧な表現を生み出しているのである。距離を遠くすることによって丁寧な表現になるというこのような装置は、言語一般に見

られるものである。例えば、よく知られているように、時制を過去にすることによって丁寧な表現になる。(ii) (iii) では、現在の気持ちを表す際現在形を使わず時制をずらして過去にすることによって丁寧な表現になっている。

ii. Did you want to see me now?

(グリーンバウム 1995: 88)

iii. 山田さんにお会いしたかったんですが。

(轟 1998: 84)

同様の言語装置の一つとして、日本語では代名詞を避けることが一般化していると考えられる。すなわち、代名詞は (10) の機能的特性をもつため、話者は代名詞を避けることにより指示物から距離を置き、丁寧な表現を生み出すことができるのである。

¹⁰ 「要点の省略と後置」以外の言語現象に関しては、轟 (2007, 2008, 2014) を参照されたい。

¹¹ 詳しい議論については、轟 (2014) を参照されたい。

¹² これらの例では、筆者が代名詞が使用されたことを確認し記録をした。しかし、録画がないため、代名詞を含む文全体の具体的な表現を確認できなかった。このように、テレビニュースに関しては、後日詳細な検討を行うことが困難となっている。テレビは基本的に検証しにくい、または検証を拒むメディアである。(中 2008: 26) が、ニュースはその典型的なものである。これに対し、同じテレビ番組でも、ドラマなどでは、後で見る方法がある。また、新聞は後日でもほぼ全文を見ることが可能となっている。テレビの言語研究のためには、テレビのニュースに関してもアーカイブの整備が不可欠であると言える。

¹³ 結論で述べるように、数量的な検証が今後の課題である。

¹⁴ イギリスの小説家メアリー・シェリーによる作品『フランケンシュタイン』(1818) においては、元々「フランケンシュタイン」は怪物を造る科学者の名であったが、後に、怪物を意味する表現としての「フランケンシュタイン」の用法が生まれた。

¹⁵ 轟 (2000) は、英語の代名詞の日本語訳に関する議論を行い、次のような制約を提案している。「他の可能な訳語が存在する場合、代名詞は避ける。」このように、日本語では基本的に代名詞を使わない、という基準が存在する。したがって、本論文で主張する代名詞使用の効果は、日本語の基準を破ることによる特殊な効果とも言える。

¹⁶ 註 15 で述べたように、轟 (2000) は、英文を日本語訳する際にも、日本語として自然な翻訳を行うためには、英語の代名詞の訳として日本語の代名詞を使うことを可能な限り避ける、という制約に従う必要があることを指摘している。

¹⁷ 註 6 参照。

¹⁸ 女性であるが、平等の観点からここでは「俳優」という表現を用いることにする。

参考文献

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications, Dordrecht.
グリーンバウム, シドニー, ランドルフ・クワーク (1995) 『現代英語文法大学編 新版』池上嘉彦・他訳、紀伊國屋書店。

神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店。

柏崎敏 (2013) 「どう書くか 沈黙の1年」朝日新聞 (石川) 2013年11月30日21面。

小泉哲郎 (1998) 『テレビジャーナリズムの作法—米英のニュース基準を読む—』花伝社。

加来由子 (2007) 「午後のワイドショー消え行く東京」『朝日新聞』2007年9月19日23面。

Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora Discourse and Empathy*, University of Chicago Press, Chicago.

増田一夫 (1995) 『『現在』のナルシズムに抗して』小林康夫編 『知の論理』東京大学出版会、227-237。

中 正樹 (2008) 「内容分析のすすめ—実証することの大切さ」小玉美意子編 『テレビニュース

- の解剖学—映像時代のメディア・リテラシー』新曜社、26-37。
- 中村捷、金子義明、菊地朗 (1989) 『生成文法の基礎——原理とパラミターのアプローチ』研究社。
- Noguchi, Tohru (1997) “Two Types of Pronouns and Variable Binding,” *Language* Vol.73, 770-797.
- 轟 里香 (1998) 「人称代名詞における日本語と英語との相違—機能的観点から」 *Kansai Linguistic Society Proceedings* 18、78-88。
- 轟 里香 (2000) 「英文和訳における問題点—代名詞を中心に」『北陸大学紀要』第 24 号、205-215。
- 轟 里香 (2007) 「映像メディアで使用される言語の変化——英語学習者に対する影響」『北陸大学紀要』第 31 号、125-135。
- 轟 里香 (2008) 「ニュース番組で用いられる言語の変化について」『北陸大学紀要』第 32 号、121-133。
- 轟 里香 (2013) 「ニュースにおける省略と後置」『北陸大学紀要』第 37 号、169-181。
- 轟 里香 (2014) 「テレビニュースにおける言語現象とその要因に関する一考察」 *Osaka Literary Review* 第 53 号、33-54。
- 轟 里香 (2015) 「ニュースで使用される言語における要点の移動について」『北陸大学紀要』第 40 号、41-53。
- 轟 里香 (2019) 「ニュースにおける代名詞の使用について」『北陸大学紀要』第 47 号、77-91。